

「正信偈」について（第二十一回）

正信偈の教え 下 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による
ぐきようだいじしゅうしとう

弘経大士宗師等

弘経の大士・宗師等、

じょうさいむへんごくじよくあく

拯済無辺極濁悪

無辺の極濁悪を拯済したまう。

どうぞくじしゅうぐどうしん

道俗時衆共同心

道俗時衆、共に同心に、

ゆいか しんし こうそうせ

唯可信斯高僧説

ただこの高僧の説を信ずべし、と。

〔意訳〕

「仏説無量寿経」の教えを弘められた菩薩や祖師がたは、限りない濁りきった悪世を救済してくださいました。

いつの世の出家も在家も、共に心を合わせて、ただ、ひたすらにこれらの高僧がたの教えを信ずるべきである。

「弘経の大士・宗師等」というのは、「お経（仏説無量寿経）を世に弘めてくださった高僧がた」ということで、大士は、ここでは、龍樹大士と天親菩薩のお二人を指します。この二菩薩は、全ての人びとを救いたいと願われた釈尊のお心を最も深く汲み取られた方がたなのです。

「宗師」は、「真宗の祖師」ということで、中国の曇鸞大師・道綽禪師・善導大師の三人の方がたと、日本の源信僧都・源空（法然）上人のお二人のことを指しています。これらの宗師がたは、二菩薩の教えに沿ってお経の本意を誤りなく読み解かれ、釈尊の教えの「真まことの宗むね」を誤りなく伝えてくださった祖師がたなのです。

この七人の高僧がたこそが、釈尊がお説きになられた、阿弥陀仏の本願の教えを世に弘められ、後の時代にまでそれを正しく伝えてくださったの

であることを、親鸞聖人は讃えておられるのです。

そして、「無辺の極濁悪を拯済じょうきしたまう」と述べておられる通り、これら七高僧のお一人お一人が間違いのない本願の教えを伝えようとしてくださったのは、極めて濁りきった悪世に生きて苦しまなければならない、数限りない人びとを拯すくいとり、本当の安楽に済わたらせようとしてくださったためであると、聖人は感嘆しておられるのです。

「道俗」は、「僧侶と僧侶でない人」ということで、つまり「僧侶であろうと、僧侶でなからうと」ということです。阿弥陀仏の願いがむけられてい人びとであり、共に本願による念仏をいただくすべての人びとのことです。聖人は「道俗」のことを、「御同朋」とも「御同行」とも呼ばれます。

「時衆」とは「その時々の人びと」ということで、親鸞聖人の時代の人びとはもちろん、今の私たちをも含んでいるわけです。

「共同心」(共に同心に)ということとは、すべての人びとが、互いにあれこれと思いをめぐらせるのではなく、心一つにするということです。聖人は、ここで、互いに心一つにするべきであると教えておられますが、それは、聖人ご自身と同じ心になってほしいと、私たちに願ってくださっているのです。

その聖人が、私たちに「ただこの高僧の説を信ずべし」と教えておられます。これは、他の人びとの教えではなくて、ただただ七高僧の教えを信ずるべきであると教えておられます。しかしそれは、七高僧が並外れて勝れた方がただからと言う事だけではなく、何よりも、この高僧がたは、阿弥陀仏の本願の通りに生きられた方がただからなのです。

この高僧がたの教えによって、聖人は、ご自身が、本願の念仏に出遭うためにこの世に生まれてこられたことを身をもって体感されたのではないのでしょうか。そして、他力の信心に生きる喜びを教えてもらわれたのではないのでしょうか。そのようなご自分と同じようになってほしいと、親鸞聖人は私たちに願ってくださっているのではないのでしょうか。